
デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

【Nコード】

N1367Z

【作者名】

ゼクセル

【あらすじ】

ある事件で1人になった闇斗。そこへ黒いデジヴァイスが降ってきた。そして、闇斗はそこから新しい人生がはじまるのだった。これは原作にオリジナルを積極的に入れていく小説なので話の内容がガタガタになるかもしれないのでそこはご了承ください。

プロローグ(前書き)

デジモンアドベンチャーの小説初投稿です。よろしくお願ひします。

プロローグ

1995年のある日、突然俺は1人になってしまった。原因はさっきのオレンジ色の恐竜と緑色の怪鳥との激突。奴らの戦いで近くにあった俺の家がオレンジ色の恐竜に潰されてしまった。両親の安否を確認するため家へと向かった。がれきの下から父と母らしき手がそれぞれ1つずつでていたので引っぱ張った。しかし、出てきたのは父と母の腕だけだった。そのとき、俺の父と母が死んだのを悟った。俺はその事実には号泣した。

あの事件の次の日、だから俺はこうして1人さまよっていた。どこにも行くあてがないから。親戚は「金がない」だの「部屋がない」だの建て前の理由を言っつて俺を追い返した。他の家も同じだった。さまよっているうちに人間の汚さやあのオレンジ色の恐竜への恨みや憎しみがこみ上がってきた。

「絶対に復讐してやる！」

そう言ったら、空から何か降ってきた。幸い周りには人がいなかった。降ってきたものを拾い上げてみる。それは黒いポケベルみたいで真ん中には画面が付いていた。そして、それは突然黒く輝き出し俺は空へと吸い込まれていった。そこで、俺は意識を失った。

プロローグ（後書き）

新参者なのでいろいろ意見をくれるとありがたいです。

主人公紹介（前書き）

闇斗のプロフィールです。

主人公紹介

あんざき
暗崎 闇斗

身長 126cm

体重 28kg

年齢 7歳

誕生日 8月10日

性別 男

性格 群れるのが嫌い

冷静

無口

孤独が好き

好きなもの

・蕎麦

・サイバル

・バナナ

嫌いなもの

・甘いもの

・苦いもの

・甘ったれる奴

・命を大事にしない者

今作の主人公。我が道を行く1匹狼。3歳のデジモン事件以降心に負の感情をいだくようになる。それがきっかけで「闇の選ばれし子

供」に選ばれてデジタルワールドに行く。デジタルワールドに行く
てからは闇の力を使役することができる。自分が「闇」であること
を誇りとしているが命を大事にしない者を味方とは思わない。利用
できる者は最大限に利用しようとする。そして闇斗のデジヴァイス
限定の能力がいくつかある。

主人公紹介（後書き）

闇斗のデジヴァイスの能力はネタバレになるのでまだ言えません。

ダークネス進化（前書き）

話がガタガタです。すみません。

ダークネス進化

side 闇斗

……俺を誰かが呼んでいる。誰だろう？俺は目を開けてみた。すると、変な生き物がこつちをみて、呼んでくる。ああ、夢か……。そうおもい、俺はまた目を閉じた。

ガブツ

俺が目を閉じるとその変な生き物は耳をかんできた。

「いつてえええ！？」

俺はいきなりきた痛みに驚いて跳ね起きた。

「痛えな。何するんだよお前。」

？「だってまたねようとしてたもん。」

「そこは悪かった。さっきから俺を呼んでっけど何の用だ？」

変な生き物にまたねようとしたことを謝ってなんで俺を呼んでたのか聞いた。

？「まず自己紹介だね。ぼくはコロモン。ぼくは君を待ってたんだ。」

「俺…を？なんで？」コロモンという生き物がそうやってきたのでなぜか聞いた。

コロモン「その黒いデジヴァイスを持つ子がくるのを待っていたん

だ。ぼくはそのパートナーデジモンだから。」

…いま分らないことだらけだったぞ。

「待て、デジヴァイスとかデジモンってなんだ？」

俺はそうきいてみた。

（10分後）

「なるほど、お前らはデジタルモンスター通称デジモンと言われる生き物でデジヴァイスはこの世界で大切なものなんだな。それを守るのがパートナーデジモンと言われるデジモンなんだな。」

約10分間の説明でだいたい納得できた。…え？なぜそんなにすんなりと納得できたか？最近は大変なことつづきだからな。これくらいありじゃねと思ったから。

「説明ありがとよ。じゃーな。」

俺は後ろを振り向いて歩いてこうとした。

コロモン「えええ！？どうして？」

「俺には守りなんざ必要ない。1人で好きにやるのが1番なんだよ。」

そう言って立ち去ろうとしたら、

ギイヤアアア

その声とともに赤い恐竜がきた。

「な、なんだ！？あれは！？」

コロモン「テイラノモンだ！」

テイラノモンは俺に突進してきた。

「くっ…」

突進をかるうじてかわすもテイラノモンはすぐに振り向いて炎を吐いてきた。これには反応できず死ぬ覚悟をした。しかし、俺は死ななかつた。なぜならその炎をかわりにあいつが受けてくれたからだ。

「お前!?!…どうして、どうして俺の身代わりなんか…」

コロモン「だって守らなくちゃいけないもん。だからだ…よ。」

俺が聞くとあいつは弱々しく答えた。テイラノモンはまた突進をしてきた。そのとき、俺の心が「テイラノモンに向かって手をかざせ」と言ってきた気がした。その通りに、俺は突進してくるテイラノモンに手をかざす。すると、漆黒なオーラが出てきて、テイラノモンの突進を止めた。

「おい、お前。どういった理由か知らんが俺のパートナーデジモンに手をだしたのは許さねえ。」

その言葉でテイラノモンを威圧し、漆黒のオーラで後ろに倒した。

「コロモン、いくぞ。さっき言っていた進化だ。」

俺がそう言つとコロモンは黒い光に包まれた。

コロモン　　ダークネス進化！……………ブラックアグモン！

コロモンがブラックアグモンに進化した。しかし、明らかに体のサイズが違った。ブラックアグモンじゃ勝てないと思った。

「ブラックアグモン！俺がやるから退け！」

俺がそう言うが

ブラック「大丈夫だよ。そこで見てて。」

ブラックアグモンがティラノモンに向かっていった。すると、ブラックアグモンはその体から想像できないほどのスピードでティラノモンを圧倒する。そして、

ブラック「ベビーフレイム」

ブラックアグモンが黒い小さな火の玉を吐いた。ティラノモンは有り得ないくらいに吹き飛んだ。そして、ボロボロになって逃げた。

「…凄いな、ブラックアグモン。」

ブラック「名前長いからブラックでいいよ。」

「そうか。」

そんな会話をしてるとある疑問が浮かんだ。

「それにしてもなんであんなに体のサイズが違ったのかてんだ
?」

「それはお前の持つ闇の力とブラックデジヴァイスによるものだ。
」

俺が疑問をもらすとそれに答えるようにヴァンパイアみたいなデジ
モンが突然現れた。

ダークネス進化（後書き）

ダークネス進化は普通の進化との相違点がいくつもあります。意見、感想お待ちしています。

ヴァンデモン(前書き)

今回は説明だけです。ストーリーは全く進みません。

ヴァンデモン

突然姿を現れたヴァンパイアみたいなデジモン。

「なんだ？お前は？」

？「私の名はヴァンデモン。君と同じ闇を愛する者だ。」

俺が聞くとヴァンデモンと言われるデジモンはそう言った。

ブラック「ヴァンデモン！？確か最近力を上げている「ナイトメアソルジャーズ」のリーダーだよ。なんでこんな所に？」

ブラックがヴァンデモンについて説明した。だが、いまいち納得いかないところがあるなあ。

「そういえばさっき「闇の力」とか「ブラックデジヴァイス」とか言ってたけど全く意味が分からないが…」

ヴァンデモン「教えてやってもいいが1つ条件がある。」

ヴァンデモンは俺が質問するとそう切り返してきた。

「…なんだ？」

ヴァンデモン「私の仲間になれ。」

俺が聞いたらヴァンデモンは仲間になれと言ってきた。

「……じゃあまず俺の質問に答えてもらおう。仲間になる件はその後だ。」

俺は仲間になるつもりはないがいろいろ情報を聞けるかもしれないということでもこんな風に言った。

ヴァンデモン「……いいだろう。まずは何から聞きたい？」

するとヴァンデモンは俺の要求に応じてくれた。

「まずは闇の力についてだ。闇の力にはどういう能力があり、使用者にどんな効果を与える？」

ヴァンデモン「闇の力にはいろいろな能力がある。例えば、先ほど貴様がティラノモンに使ったように盾にしたり、相手に球状にしてぶつけることができる。そして、使用者に与えられる能力については知力、体力などの上昇だ。だから貴様は3歳にも関わらず大人っぽいしゃべり方や難しい言葉が分かるのだよ。」

なるほどな。だからこんなに流暢にしゃべれるのか。さっきのティラノモンの件についても納得がいくな。

「じゃあ次はブラックデジヴァイスについてだ。」

ヴァンデモン「ブラックデジヴァイスは普通の神聖なるものとは違って暗黒なものだ。闇に反応し、闇と共鳴することで普通の進化と異なる進化「ダークネス進化」ができる。ダークネス進化で進化したデジモンは必ずウイルス種になり、通常とは違う異質な能力も備わるようになる。貴様のパートナーデジモンのブラックアグモンで

「いえは高速移動のことだ。弱い成熟期のデジモンなら簡単に倒せるだろうな。」

これも納得がいくな。ブラックがテイラノモンのときにみせた高速移動についても成長期にも関わらず成熟期を倒したことも理解できた。ヴァンデモンの情報は信憑性があるな。

「もう一つ聞く。お前の組織は何のためにある？」

ヴァンデモン「私の組織は光と闇が混ざり合った世界を作り出すためというんなものへの復讐だ。」

「その中に人間は？」

ヴァンデモン「もちろん入っている。」

利害が一致するな。これを利用しない手はないな。

「いいだろう。仲間としてではなく手を組むだけだ。そこを間違えるなよ。」

ヴァンデモン「そのパートナーデジモンは？」

ブラック「僕は闇斗にどこへでもついていくよ。」

ヴァンデモン「よかろう。では私の城へ行く。ついてこい。」

城とか持ってるのかよ。ヴァンデモンの城へ向かう俺とブラックだった。

ヴァンデモン（後書き）

意見、感想お待ちしております。

交渉（前書き）

すみません。話がガタガタかもしれません。

交渉

俺らはヴァンデモンについていき、城にたどり着いた。

「随分と趣味の悪い城だな。」

ヴァンデモン「よくそれを城の主人の前で言えるな。まあ、中に入るといい。」

ヴァンデモンはその後城の正門を開け、俺らの中へ入れてくれた。中も想像通り趣味が悪い。まあ、言わなかったが。

？「ヴ、ヴァンデモン様！そ、それは人間ではありませんか！？い、入れていいのですか？」

ヴァンデモン「そいつは闇の紋章の選ばれし子供だ。バケモン共部屋を案内してやれ。」

バケモン「そ、そのかたが…分かりました。では闇の紋章の選ばれし子供様。部屋を案内します。」

「俺はそんな長い名前じゃねー。闇斗つつつ名前があるんだよ。」
バケモン「すみません。闇斗様。部屋へ案内します。」

この後バケモン達の案内で自分の部屋についた。中は少し薄暗いが城の中よりまだマシだった。俺はすぐに床に転がり込んだ。久しぶりに安心して休めると思ったからだ。まあ、絶対に安心とは言い切れない気がするが。

ブラック「なあ、闇斗。」

闇斗「ん、どうした？ブラック。」

ブラック「あのさ……」

ブラックが俺に何か言いかけたとき、

ヴァンデモン「闇斗。交渉の内容確認だ。」

闇斗「わかった。わりいブラック。また後でな。」

俺はヴァンデモンによばれついでいった。ついていくと「尋問室」と書かれた部屋についた。…え？尋問される？

ヴァンデモン「別に尋問はしない。内容確認だけだ。」

うお！？お前人の心読めるのか？

ヴァンデモン「顔にでていたぞ。」

…マジ？俺そんなに分かりやすい？

ヴァンデモン「内容確認だ。私達の仲間になる条件としては「人間への復讐」、「闇の紋章の探索」これでよいか？」

「待て。闇の紋章ってなんだ？」

ヴァンデモン「闇の紋章とはダークネス進化の補助道具だ。これがあれば成熟期以上にも進化が可能になる。あと、貴様の闇の力を制

御しやすくなる。」

なるほど。理解した。でも、条件が少ないなあ。あともう一つくらい……そうだ！」

「ヴァンデモン、話を戻すが交渉の条件にもう一つ付け加えてほしいことがあるんだが。」

ヴァンデモン「なんだ？」

「俺をリーダーにした特別部隊をつくること。つくったらそちらの依頼も引き受けよう。どうだ？」

俺の付け加える交渉内容についてヴァンデモンは考えた。その結果、

ヴァンデモン「いいだろう。人員もそちらで選ばせてやる。」

ほっ。なんとか成功した。

ヴァンデモン「では交渉内容はこれでよいか？」

「ああ。」

俺は交渉を承諾して自分の部屋に戻った。ブラックが床で寝ていた。しかし、扉を開ける音で起きてしまった。

「あ、すまん。」

ブラック「別にいいよ。」

「そういえばさっきなにを聞こうとしていたんだ？」

俺はさっきなにを聞いたかったかブラックに訪ねた。

ブラック「あのさ…僕邪魔なんだよね？」

「…は？なんで？」

ブラック「だって、闇斗僕と会ったとき俺は1人でいって言うてたじゃん。」

ああ、まだあれ気にしていたのか。別にもう気にしなくていいのに。

「最初はそう考えていたけど、あのときにお前がいなかったら、俺は死んでいた。守ってくれた奴を嫌う理由なんてどこにもないぜ。ましてやこの世界はわからないことだらけだ。また死んでしまう状況になるかもしれない。だから、俺のパートナーデジモンになってくれないか。俺はそのほうが助かる。」

ブラック「だ〜か〜ら、闇斗のパートナーデジモンなんだって僕。これからもよろしく。」

ブラックがそう言うと俺らはお互いの手を握りあった。こうして、俺らの旅は始まるのだった。

交渉（後書き）

闘争がなぜあのような交渉内容を提示したのか、後の話で明らかになります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1367z/>

デジモンアドベンチャー ダークネス・サイド

2011年12月11日22時48分発行